

「継承!! 海士の歴史・文化を誰もが語ることができる人づくりをめざして」

海士町中央公民館

1 海士町中央公民館の概要

海士町は日本海に浮かぶ隠岐諸島の中の「中ノ島」にあり、人口約 2,300 人、世帯数約 1,100 の町である。集落が 14 地区あり、それぞれの地区に地区公民館がある。中央公民館は各地区公民館を統括する立場で、地区との連携、公民館活動を促進している。中央公民館では、目標として全ての人が自己実現できる学習活動の場の設定や他の個性の学び、人と人が優しく結び合える能力・力量の育成、ふるさとの歴史や文化・自然を愛するとともに継承できる人材の育成を目指している。

2 事業の概要

(1) 事業のねらい

海士町では「自立・挑戦・交流～そして、人と自然が輝く島～」を経営指針にあげ、ものづくりから始まる町おこしに力を傾注している。

人づくり（教育）においては、公民館事業と連携し、町をあげての取り組みを行っている。中央公民館では地域に目を向け、「ふるさと」を意識したプログラムに取り組み、海士の魅力を発掘してきた。U I ターン者が増える中、ふるさと海士への愛着を育て、歴史・文化を継承するための環境づくりを目指す。

(2) 具体的な取組

ア ふるさと再発見ツアー

「ふるさと検定」に出題されている場所を中心として実地を探索し、ふるさとを愛し、海士町の文化や自然を継承していくとともに、未来を切り拓いていく町民の育成

(ア) 菱浦散歩（4月）

平成 24 年は小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が明治 25 年 8 月に来島してから 120 年の記念の年であったため、八雲が隠岐の中でも特に愛したゆかりの深い場所、海士町の玄関口である菱浦地区にスポットをあてた。車ではなく、自分の足で歩いてみることによって、同じ場所でも今まで気づかなかった見方や歴史を知ることとなった。講師には菱浦で生まれ育った町の文化財保護審議会委員さんをお願いした。昔の写真なども資料として付けていただき、菱浦の今昔も知ることができた。



菱浦散歩

(イ) 隠岐ジオパーク植物編（6月）

隠岐諸島が平成24年、「世界ジオパーク」認定を目指していたため世界的にも貴重な海士の地質と珍しい植物を知ってもらうことで、ふるさとへの愛着を育てようということで実施した。何度かツアーを開催している場所でも、切り口が違ふと、また新しい発見がある。講師は、普段から「ジオパーク」の案内をされている町の文化財保護審議会委員さんをお願いした。



隠岐ジオパーク植物編

イ 海士町ふるさと検定

上記にある「ふるさと再発見ツアー」の会場となっているのが、この「海士町ふるさと検定」に出題された場所である。「海士町ふるさと検定」は多くの人に町の歴史・文化に関心を深めてもらうことを目的としており、小学生が町長へまちづくりに関する提案を行う「子ども議会」での提案から生まれた。平成22年度から海士町の一大イベントである「海士町産業文化祭」に合わせ検定を実施した。3回目の実施となった今年度は、残念ながら大人の受験者はいなかったが、小学生が14人受験した。158問コースと50問コースに分かれ、問題を一所懸命解く姿が見られた。



海士町ふるさと検定

ウ 子どもダッシュ村

自然体験や労働体験を通して主体性やふるさとを愛する心、思いやりの心を育む。

(ア) 稲作体験（6月田植え、7月草取り、10月稲刈り、2月もちつき）

地域で長年、稲作体験の指導をしていただいている方に今年度も講師をお願いし、近隣の2町村の小学生にも参加を呼び掛け実施。海士町は隠岐島前3島の中で、現在、唯一米作りをしている。日本の文化と特に関わりの深い米作りを子どもたちにも体験してもらい、お米の大切さを感じてもらうことをねらいとしている。自分たちで植え、草取りをしながら稲の成長を観察した。稲穂が黄金色になり頭を垂れる頃、稲刈りを実施。そして、いよいよ毎年子どもたちが楽しみにしている「もちつき大会」を、今回は同じ町内でも訪れることが少なく、子どもが少ない地区で開催した。



田植え

地区の方におもちの丸め方を教えていただいたり、色々と手伝っていただき、無事に開催することができた。今回は初めて、その地区で聞き書きして作成したその地区だけの「ふるさと検定」を実施。小学生だけでなく、地区の方も自分の地区の魅力を再発見することができたのではないだろうか。



地域の方ともちつき

(イ) 素潜り体験（8月）

海士町は海に囲まれ、さざえ、アワビなど美味しい魚介類に恵まれている地でもある。そんな中、海士の子どもたちは小さい頃から海に潜り、さざえなどを獲ったりして遊んでいるが、最近では潜り方を知らない子もいる。そこで、海の楽しさを知ってもらい、自然への感謝と、ふるさと海士への思いを育んでもらうことをねらいとして開催した。まずはシュノーケルのつけ方、息の仕方などの基本を海士在住のプロのダイバーの方に教わり、続いて実際に海に入っただけの講習。友達同士で競争するように夢中で潜っているうちにすっかり上達したようである。



シュノーケルのつけ方講習

(ウ) 廃油キャンドル作り（8月）

海士の竹を使い、廃油キャンドルを作ることによって、リサイクルやエコについて考えるきっかけを作る。また、町の夏の大会である「キンニャモニャ祭り前夜祭」でこのキャンドルを使用してもらうことで、お祭りに参加したという充実感が得られることをねらいとして開催した。何もしなければ捨てられてしまう廃油にきれいな色をつけてキャンドルにした。それに合わせ、環境コーディネーターにリサイクル、節約について話してもらい、環境問題について考えてもらった。時期が夏休み期間中であったため、夏らしい体験をしてもらおうと「そうめん流し」も計画。長い竹を流れてくる「そうめん」をみんなで食べ、夏を満喫できる企画だったのではないかと思う。



廃油キャンドル作り

エ 後鳥羽人人材バンク

町内の知識や技能の習得者を後鳥羽人として登録して、社会教育・学校教育の要請により協力をしていただき、ふるさと教育の推進を図る。

今年度、今まであった名簿を整理し、学校や各地区へ活用を呼び掛けたところ、活用が増えた。今後も新規登録者を増やし、地域の方の活躍の場を提供し、地域の活動を支援していく。

オ 民話の語り部

民話の宝庫である隠岐の中にあつて、海士町でもたくさんの民話が語り継がれてきた。民話を語ることは、単なる娯楽ではなく、郷土の歴史、生活の知恵など、大切なことを伝える手段でもあった。しかし、生活の様式の変化とともにそれもすたれ、現在海士町において海士弁で民話を語れる方もほとんどいなくなってしまう。そこで、町の宝でもある海士弁で語る民話や伝統文化を子どもたちに継承していくことを目的としてこの講座を開催した。海士弁で民話を語れる方に講師になっていただき、海士弁で生き生きと語られる民話は、海士弁がわからなくても楽しく、また海士の習俗や歴史なども教えていただき、大変好評である。この講座をきっかけとして、学童保育での語りも実施され、子どもたちへの継承にも一歩近づいた。これからも継続して実施し、多くの町民の方に聞いてもらうようにしかけていき、いずれは、語り部の養成を目指したい。



民話の語り部講座

3 事業の成果と課題

この一年、事業のねらいである「ふるさと海士」への愛着を育み、歴史・文化を継承するための環境づくりを目指してきた。各種講座に参加された方からも好評を得ており、ふるさとの魅力を再発見する場を作るという目的は果たせた。

今回、会場やしかけ作りなどに十分な時間が取れると、参加者の方から「楽しかった」「来て良かった」などの声が多く聞かれた。企画運営のより専門的な知識と技能スタッフの配置と予算の充実が求められる。

一方、参加者が固定化されてくる傾向も見られる。町民誰もが参加しやすくなるように案内の方法、講座の質、内容のバランスを考え、会場の設定なども工夫する必要がある。

4 今後の方向性

今年度は歴史・文化の継承の場作りを進めていったので、今後は回数を重ねながら、参加者に案内人の役を体験してもらうなどし、最終的には「ふるさと海士」を語れる人を育てるといった方向性を出してみたい。